

令和8年（2026年）3月1日

2026年 北上・西和賀観光物産展 開催レポート（2日目）

令和8年（2026年）3月1日、北上・西和賀観光物産展は2日目を迎えました。昨日に続き、空は一点の曇りもない青空が広がり、春本番を思わせる柔らかな陽光が銀座の街を包み込んでいます。

マラソンの熱狂と、静かな銀座の一角



この日は、3万9千人のランナーが駆け抜ける「東京マラソン」の開催日でもありました。有楽町駅から会場へ向かう道すがら、歌舞伎座と青空のコントラストを楽しみにしていましたが、銀座の街は昨日以上の混雑です。晴海通りは応援に駆けつけた国内外の人々で埋め尽くされ、コース周辺は横断禁止。しばらく地下道を歩いて迂回することになりましたが、東京の活気を肌で感じる特別な一日となりました。



ところが、マラソンの喧騒を通り過ぎて「いわて銀河プラザ」へ入ると、館内は昨日よりも落ち着いた雰囲気でした。多くの人がマラソン応援に足を運んでいたためか、民話語りの特設コーナーに集まった人も、昨日の大盛況に比べれば少し控えめです。しかし、そのおかげで今回は最前列、語り部の方のすぐ横という特等席に座ることができました。

心に染み入る、北上弁のぬくもり



本日の口演は、**蘭牧枝氏**の「鬼の豆」に始まり、**高橋道直氏**の「豆腐田楽と小僧の知恵」、**鈴木昌子氏**の「合せて六十」、そして締めくくりは**小野寺るり子氏**の「嫁さんになったねこ」の4演目です。手を伸ばせば届きそうな距離で聴く語りは、格別でした。北上弁の響きに耳が慣れてきたのか、あるいは語り手の方々が私たちのために分かりやすく話し

てくださったのか、一つひとつの言葉がいつも以上にすんと胸にはいりました。昔懐かしい話の筋に納得して、語り終わるたびに心からの拍手を送りました。



わずか30分という短い時間でしたが、温かみのある北上の話に触れ、心の中がポカポカと「ほっこり」するような、至福のひとつときでした。こうした民話は、単なる昔話ではなく、私たちの郷土が育んできた大切な文化的

遺産です。語り部の皆さんの声を通じて、その価値を次世代へと繋いでいくことの尊さを、改めて強く実感しました。

ふるさとへの想いを繋ぐ交流

口演が終わった後、語り部の皆様へ感謝をお伝えし、昨日もお会いした北上市の若手職員の方にも挨拶をしました。展示ブースでは、観光地としての錦秋湖の鮮やかな紅葉についても紹介がありましたが、話を聞いているうちに、ぜひ現地を訪ねてみたいという思いが強まりました。「北上駅から出発する紅葉ツアー」などがあれば、ぜひ参加したいものです。

職員の方と「また来年もこの場所で会いましょう」と約束を交わし、名残惜しさを感じつつ銀河プラザを後にしました。

おわりに

2日間にわたる物産展への参加を通じて、郷土の言葉に触れ、郷土の味を楽しみ、そして何より郷土を愛する人々と触れ合うことができました。銀座という都会の真ん中にいながら、心はしっかりと岩手の風景の中にあったような気がします。

この物産展が、北上・西和賀と首都圏を繋ぐ温かな懸け橋として、これからも続いていくことを願っています。私も今夜は、昨日購入しお酒と松前漬けを楽しみながら、この2日間の素敵な余韻に浸りたいと思います。皆様も来年はぜひ、この温かな空間を体験しに足を運んでみてはいかがでしょうか。



(菊池 潤 記)